

稲 作

平成23年度 水稻作柄現地調査報告書

平成23年 9 月
社団法人 北海道米麦改良協会

【調査月日】 平成23年 8 月29日(月)～31日(水)

【調査先】

◎道南班 蘭越町・道南農業試験場・北斗市・厚沢部町・今金町・厚真町・長沼町
中央農業試験場岩見沢試験地

◎道央・道北班 当別町、美唄市、新十津川町、深川市、沼田町、小平町、士別市
上川農業試験場、旭川市、東川町、富良野市
(各市町のほ場は、現地奨決ほ場を中心に調査)

【参加人数】 約70名(部分参加含む)

【総合検討会】平成23年 8 月31日(水) 空知農業会館 4階大会議室

標記調査ほ場の作柄概要および総合検討会で討議されました内容・対策の要点につきまして、下記のとおり報告致します。

つきましては、本年産米の収穫・乾燥調製や24年産米生産に向けての指導事項も示されましたので、内容をご確認いただき、今後の取り進めにあたりご配慮頂きたくよろしく申し上げます。



1. 各地区における作柄概況について

【道南地区】

- ・は種期から分けつ期にかけて、平年より遅れた生育であったが、7月以降の天候回復により、各地区とも生育は早まり、概ね良好な状態である。
- ・不稔歩合も1桁台と平年より少ない見込で、茎数も概ね平年並みが確保されている。

- ・成熟期も平年より若干早くなることが見込まれている。(早い地区のななつほしで9/15、ふっくりんこで9/20前後～の見込)
- ・昨年(作況 渡島104・檜山103)ほどではないが、近い収量が見込まれそうな感度。
- ・直播栽培についても、苗立ちが良く、生育も進み登熟が良好であり、収量も期待できる状況にある。
- ・いもち病については部分的に発生している

が大きな被害（拡大）は無い見込。

【後志地区】

- ・移植が遅れたものの、7月以降の好天により、生育進度は平年並みに程度に回復した。
- ・草丈・葉数は平年並みとなっているものの、茎数については蘭越・共和地区とも平年を大きく下回っている。
- ・成熟期は概ね平年並みであり、「中苗ななつぼし」で9/15ごろと見込まれる。
- ・不稔調査はこれから実施されるが、既に行われた倶知安地区の成苗の調査では平年より少ない結果となっており、蘭越・共和地区についても平年より高い稔実歩合が見込まれる。

【日胆地区】

- ・分けつ期までの生育は遅れていたが、7月以降の好天により、生育進度は回復し成熟期も5日程度早まる見込み。（平年は9/21）
- ・本年の気象経過はこの地区の生育に良く反映し、草丈・葉数・茎数いずれも平年並みとなっている。
- ・不稔も少なく、登熟歩合もあがることが見込まれる。（7月下旬の低温の影響は受けていない模様）

【石狩地区】

- ・春先の生育遅れはカバーできており、平年比3日早い生育となっている。

- ・不稔は少ない（10%）ものの、穂数・籾数が少ないことから良くて平年並みの状況。
- ・いもち病、カメ虫の発生は少ない。

【空知地区】

- ・南部では、出穂期まで平年より遅い生育であったが、登熟期以降の天候回復により、成熟期は概ね平年並み（ななつぼし中苗で9/16、平年9/17）と見込まれる。
- ・不稔歩合も平年より少なく、10%前後であり、出穂期40日間の積算気温を勘案すると登熟も良好（高整粒）と見込まれる。（平年並みかやや上回る感度）
- ・カメムシの発生は少なく、いもち病発生も部分的である。
- ・岩見沢試験地での試験は苗質・初期分けつの少なさが影響し、穂数が少ない生育となっており、平年作を下回る作況である。
- ・ただし、葯長は短くなく、登熟も順調であることから、回復も期待できる状況である。
- ・中空知地区の作柄については、石狩地区に似ており、不稔は少ない（美唄・深川で1桁台）ものの、穂数（ほ場間差が大きい）・籾数が少なく、平年をやや下回りそうな作柄である。（今後の登熟が順調に推移しても平年並み程度か）
- ・生育進度は進んでおり、9/10以降の刈取見込である。
- ・北空知地区の作柄についても、中空知地区と同様な傾向であるが、沼田地区のきらは平年並みの籾数が確保できている。



【留萌地区】

- ・留萌地区においては、不稔は少ないものの（5%程度）「ななつぼし」では、穂数・籾数が平年値からの減少幅が大きく、「ななつぼし」の作付が80%を占めていることから、平年作確保は厳しい見方である。

【上川地区】

- ・上川地区（中央・北部）においては、穂数は平年をやや下回るものの、登熟が良好であることや、不稔歩合が少ないことから、平年作の確保も期待できる状況である。（永山では平年並みの籾数を確保）
- ・東川のは場で、試し刈りのサンプルを確認したが、拝見・粒張も良好であり、品質的に良いものが期待できる。（9/15頃から刈取が本格化する見込～平年比早3日）
- ・上川南部においては、中・北部に比べ籾数が確保され、不稔歩合も平年並みであることから、平年作が見込める状況である。
- ・上川管内全般において、病害虫の発生は少なく、いもちの発生も部分的で少ないものであった。

2. 総合検討会における協議事項について

- (1) 各参加者から、視察ほ場の概要報告（要旨は上記1のとおり）を頂いたあと、本年産米の全道的な傾向について現段階でのまとめを行いました。
- (2) 全道的な傾向として、以下の項目があげられました。

- ・穂数が少ない地域が多く、籾数不足が懸念される。
- ・収量構成要素は落ち込みそうだが、登熟歩合は高そうなので、今後の回復（挽回）は期待できる。
- ・不稔は5%前後と例年の半分程度の地域が多い。
- ・病害虫の発生は少なく、いもち病についても部分的に発生しているほ場があるが、発生面積は少なく、原因も特定されているものが多く、広がっている状況でもない。
- ・褐変も少なく、どの地区のほ場も近年になくきれいである。

- (3) 茎数（穂数）が減少していることについては、春先の降雨（天候不順・作業遅れ）がその後の生育に影響を及ぼしていることが考えられるが、活着は良かったはずで、下位分けつしないほど気象条件が悪くなかったと考えられることから、苗質に原因があるのか、乾田化がなされなかったことによる地力不足なのか検証が必要との意見・見解が出された。

- (4) 収穫までの技術対策として、以下の項目があげられ、生産者への啓発・周知が必要なものとなっています。

- ・割れ籾が少ないので刈り遅れによる品質の劣化は少ないと想定されることから、収量狙いで刈取を遅らせてしまうことも懸念される。

⇒籾数が少ないと成熟期を迎えるのが早いことから、刈り遅れにならないよ



う啓発が必要。

- ・この時期になっても乾いていないほ場が多く、刈取まで2週間程度に迫っていることから、適期収穫を逃す要因になるのではないか懸念される。

⇒台風の接近など気象条件も踏まえたい

えでほ場の乾きを促すよう啓発が必要。

- (5) また、次年産米の生産にあたり、下記項目の注意喚起があげられ、(4)とあわせて生産者へ啓発・周知が必要なものとなっています。

- ・雑草が目立ったほ場が多く、薬剤の使用について見直しも必要。
- ・いもち病の発生は23年産では少～微発生にとどまる見込みだが、24年産生産にあたっては気をゆるめることなく、引き続

き防除（早めの対策）を行っていくことが必要。

- ・来春の乾田化促進にあたって収穫後の溝掘り作業を行うことが必要。
- ・栽植密度を守るなど、初期生育向上に向けた取組が必要。

- (6) まとめとして、「品質的にタンパク値は下がる要素はなく、例年より高くなる可能性はあるが、アミロースが例年より下がるものと予想され、食味は一定の水準が確保されるのではないか」「最終的な収量は良くて平年並みであり、平年を多少下回る水準が見込まれる」との見解を検討会の座長をして頂いた道農政部岩田上席普及指導員より頂きました。

以上